

変更した。一次効果：奏効率は80% (117/146)で、1年生存率は96.2%であった。局所再発は7.5% (11/146)に認めた。有害事象に関してgrade 5が1例あるが殆どはgrade 1以下の肺毒性であり、許容範囲内と考えている。短期治療成績であるが肺癌に対する体幹部定位放射線治療は有効な治療であると考えている。

## 12 遠隔転移を伴う進行食道癌にする化学放射線治療

福田 貴徳・末山 博男・平野 正明\*  
津端 俊介\*・本田 謙\*・兼藤 努\*  
県立中央病院放射線治療科  
同 消化器内科\*

【背景・目的】進行食道癌で遠隔転移を有する症例は根治が困難で、症状緩和あるいは生存期間の延長が治療の主目的となる。当院では、遠隔転移を有する食道癌に対しては燕下障害の改善を目的として放射線治療±化学療法を施行することがある。今回進行食道癌で、他臓器転移を伴う症例に対して化学放射線治療(CRT)を施行した症例について検討したので報告する。

【対象】1997年～2006年の間、食道扁平上皮癌症例で他臓器転移を伴う症例のうち、化学放射線治療を施行した19例。転移臓器は肺8例、肝11例、骨2例その他3例(重複あり)。

【方法】放射線治療は60Gy/40f～64.5Gy/43f(加速加分割照射)。同時併用した化学療法はいわゆるStandardFP(CDDP 70mg/m<sup>2</sup> 5-FU 700mg/m<sup>2</sup> × 5日2クール)が6例、low-doseFP(CDDP 3mg/m<sup>2</sup> + 5-FU 250mg/m<sup>2</sup>を照射日連日投与)が7例、low-dose 5-FU(5-FU 300mg/m<sup>2</sup>照射日連日投与)が5例。その他が1例。その後も全身状態がよければ全身化学療法を継続した。

【結果】全体の平均生存期間は9.4ヶ月、1年生存率は33.3%。Standard FPとlow-dose FP・low-dose 5-FUの比較では生存率に有意差を認めることができなかった。一次効果判定で、局所に関しては19例中10例がCR、9例がPR判定。

遠隔転移に関してはPR 3例、NC 4例、PD 12例だった。

【まとめ】遠隔臓器転移を有する進行食道癌に対して化学放射線治療を施行した症例について検討した。局所制御は良好だったが、遠隔転移の制御が不良であり、予後の改善がみられなかった。治療成績の改善には、遠隔転移および局所にも効果のある化学療法の開発が必要であると思われた。

## 13 当科における乳癌脈絡膜転移の検討

神林智寿子・佐藤 信昭・田中 乙雄  
梨本 篤・土屋 嘉昭・藪崎 裕  
瀧井 康公・中川 悟・野村 達也  
坂田 英子・木戸 知紀

県立がんセンター新潟病院外科

〔症例1〕53歳、女性。術後4年、肺、骨、胸膜転移出現。術後5年2か月、肝転移出現。術後6年1か月、両側脈絡膜転移出現し、両側RAD(50Gy/25)施行。矯正視力(右/左)は、(0.2/0.4)→(0.2/1.0)と改善。(RAD直前に右眼は網膜剥離を呈し視力低下、腫瘍はRADにて著明に縮小したが右眼の視力の回復はみられなかった。)脈絡膜転移出現後3年6か月にて永眠。

〔症例2〕35歳、女性。術後1年10か月局所再発切除。術後2年10か月、肺、肝、骨、脳転移、肺癌性リンパ管症出現。術後3年1か月、両側脈絡膜転移出現し両側RAD(46Gy/23f)施行。矯正視力(右/左)は(0.6/1.2)→(1.2/1.2)と改善した。

【考察】乳癌術後脈絡膜転移の頻度は0.19%、多臓器再発に追従するものが約80%と報告されている。症状は視力低下、視野狭窄、飛蚊症、霧視。診断は眼底所見、蛍光眼底造影、US、CT、MRIで行われる。局所治療としては放射線外照射が約90%弱の効果があるとされている。